



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

PI-PLCによるCEA遊出現象を応用した胃癌潜在性腹膜播種性転移検出法の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国枝, 克行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/280

-----はしがき-----

この報告書は平成6年度から3年間にわたる胃癌腹膜播種性転移の客観的早期診断法とそのキット化に関する研究成果をまとめたものである。

胃癌の腹膜再発は最も重要な予後因子であるが、肉眼的に播種巣が形成されてからは、いかなる治療も十分な効果をあげることはできない。しかし手術中に潜在的腹膜播種があることが診断できれば、閉腹前に抗癌剤や免疫製剤を腹腔内に投与でき、予後の改善および完治につながる。

胃癌の腹膜播種性転移の早期診断法としては腹腔洗浄細胞診が広くおこなわれている(以下細胞診)が、病理医のいない施設においては術中に判定することは不可能であり、また、肉眼的に明らかに腹膜播種がみとめらめる例においても施設によっては半数近くの見落としがある現状である。

さて癌細胞表面には carcinoembryonic antigen (以下CEA) が存在するが、これは Phosphatidylinositol phospholipase C (以下PIPLC) によって癌細胞表面との疎水結合を選択的に切断され、強制的に細胞から遊離される。

申請者らは、まずこの性質を利用して、客観的な胃癌腹膜播種性転移早期診断法を開発した。

さらに、申請者らは、この方法をさらに効率的に運用することで、いかなる施設においても術中に手術室において判定可能となる胃癌腹膜播種性転移早期診断 kit を製作し、その有用性を示した。

この報告書は二部に分かれている。

第一部は PIPLC を利用した客観的な胃癌腹膜播種性転移早期診断法を述べた「Phosphatidylinositol phospholipase C を用いた carcinoembryonic antigen 可溶化の試みと腹腔洗浄細胞診への応用」である。

第二部は、上記を発展させることで製作可能となった胃癌腹膜播種性転移早期診断 kit の有用性を示した

「Carcinoembryonic antigen 可溶化による感度増強法を応用した腹腔内洗浄細胞診キット化の試み」である。

この研究成果が腹腔内洗浄細胞診キットの製品化につながり、いかなる市井の施設においても、潜在的腹膜播種を検出が可能となり、早期の薬剤腹腔内投与が行えることにより、胃癌患者の予後の改善につながれば幸いである。

-----研究組織-----